

仲間との「熱い心」の触れ合いと 「役割」作りこそ、社会人基礎力を高める

仲のよいクラスは学習成績もよい!?

人間には、もともと何かを達成すること自体が喜びで、それを目指して頑張ろうとする気持ち＝「達成動機」があります。また一方で、他者と仲よくやっていたいという「親和動機」もあります。この2つは、人を動かすもとなる大きな力です。ところが学校では、どちらかと言えば前者の達成動機ばかりが強調されてきました。この場合の達成動機は、自分自身を高め、競争に勝つことを目指すことです。ところが最近の研究では、親和動機も含めた人間関係に関連した社会的動機づけが、達成動機づけに影響するという報告が内外でなされています(中谷素之編著 2007『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり』金子書房 Juvonen, J.& Wentzel, K.W., 1996, Social motivation, Cambridge University Press)。生徒や先生との間の人間関係がよい方が、学びたいという気持ちが強くなり、生徒同士でも仲のよい関係ができていくと、互いに教え合ったりして学習にも意欲が生まれるということです。つまり、親和動機を高める方が達成動機も高くなる、ということなのです。

人間関係の希薄化が若者の自信を奪い、新たな処世術を生む

達成動機を高めるために不可欠な「自信を持つ」ということは、人間関係の中で、他人に評価される中で生まれてきます。自分の評価軸だけでは、決して自信というものは生まれません。日本の若者には、自信が薄れてきているように思われます。この自信のなさを、自分以外の他者を軽視することでカバーし、世の中を渡っていくとする若者が増えてきている感じがします。きょうだいが少ないため、家庭でも学校でも大事にされ、何でも思い通りになる環境で育てられると、本当の意味での自信、いわば自尊心は育ちにくく、逆に軟らかくぶよぶよした、傷つきやすいものになってしまつと思われれます。

その一方で、今の若い人はあらゆる場面で、個性や自分の考え方を強く求められています。「自分がやりたいことは自分で見つけなさい」というように。さらに、自己責任も求められます。そうすると、社会に出ていくとしても自信がないので、自分を守るために自然に他者を軽視するという、心理的機能が働くようになってしまっていると考えられます。私は、そういう他人軽視の感覚を「仮想的有能感」と呼んでいます。この仮想的有能感では、行動や考え方のベースが他者との比較になります。したがって、学力や思考力を育てるためにも、よいはずがありません。

有能感／自己肯定感の測定方法

■「自尊感情」尺度の項目

※自尊感情とは、「自分を肯定し、大切に思える感情」。自己肯定感といってもよく、自信にも近いが、優越感やプライドのように他者との比較で成り立つ感情とは異なる。いわば、「自分はこれでいい」「今のままで生きる価値がある」といった感情。ローゼンバーグのこの尺度は、測定として最も広く使われるとされる心理尺度。

	ない	当てはまらない	やや当てはまらない	どちらともいえない	まるまる	やや当てはまる	当てはまる
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	1	2	3	4	5		
2. いろいろなよい素質を持っている	1	2	3	4	5		
3. 敗北者だと思ふことがよくある	1	2	3	4	5		
4. 物事を人並みには、うまくやれる	1	2	3	4	5		
5. 自分には、自慢できるところがある	1	2	3	4	5		
6. 自分に対して肯定的である	1	2	3	4	5		
7. だいたいにおいて、自分に満足している	1	2	3	4	5		
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	1	2	3	4	5		
9. 自分はまったくダメな人間だと思ふことがある	1	2	3	4	5		
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ	1	2	3	4	5		

※当てはまる…5、やや当てはまる…4、どちらともいえない…3、やや当てはまらない…2、当てはまらない…1として合計する（ただし3、5、8、9、10は配点を逆にして合計）。

〈山本真理子・松井豊・山成由紀子の訳による(1982)「堀洋道(監) 心理測定尺度集(1)―人間の内面を探る―自己・個人内過程―」から〉

※東海大学・近藤卓教授の調査によると、日本は、大学生でも小学生でも平均25〜26点。30点はいかない。平成20年にカナダ、フィンランド、台湾、日本の4カ国で小学生対象に実施したところ、カナダが一番高く、平均が30点をやや上回り、次いでフィンランド、台湾。日本は最下位だった。日本の特徴としては、小学4・5・6年生と学年が上がるにつれ、はっきりと下降する傾向が見られる。「受験などの社会的ストレスにさらされ、より強く他者との比較を意識するようになるため」と推測している。

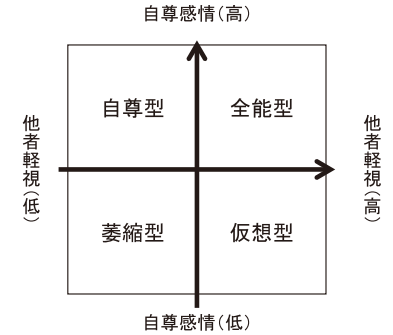
■「仮想的有能感（他者軽視）」尺度の項目

	全く思わない	あまり思わない	どちらともいえない	時々思う	よく思う
1. 自分の周りには気の利かない人が多い	1	2	3	4	5
2. 他の人の仕事を見てみると、手際が悪いと感じる	1	2	3	4	5
3. 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	1	2	3	4	5
4. 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	1	2	3	4	5
5. 他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	1	2	3	4	5
6. 自分の代わりに大切な役目を任せられるような有能な人は、私の周りに少ない	1	2	3	4	5
7. 他の人を見て「ダメな人だ」と思ふことが多い	1	2	3	4	5
8. 私の意見が聞き入れてもらえなかったとき、相手の理解力が足りないと感じる	1	2	3	4	5
9. 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない	1	2	3	4	5
10. 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない	1	2	3	4	5
11. 世の中には、常識のない人が多すぎる	1	2	3	4	5

資料提供 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 速水敏彦教授

※速水先生らのある調査によると、大学生の平均は、29.88(5段階評定11項目の合計値)

有能感の類型



図版提供 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 速水敏彦教授

現代の有能感「仮想的有能感」だと、学習も、日常生活も不安定

実際、この仮想的有能感の強い人と、学習に対する動機づけへの関連・影響という観点で高校生に調査してみました(※1)。具体的に言うと、まず、この仮想的有能感に加え、自尊感情の高低をかませて、有能感の4類型で生徒を分類しました。つまり、自分にも他人にも満足している「自尊型」、自分には満足だが他人に不満な「全能型」、自分是不満足だが他人には満足している「萎縮型」、そして自分にも他人にも不満な「仮想的型」の4類型に、です。本来、自己有能感と例えば、自分にも他人にも満足している「自尊型」がイメージされがちですが、そうではない形での有能感を持つ人が増え、まさに自分にも他人にも不満な「仮想的型」こそ、本来の有能感の低さを、他人を軽視することで、仮想的に有能感を生み出す特異な現代的傾向として、私は注目しているのです。そのタイプを、まずここで抽出してみました(抽出するための尺度は「有能感／自己肯定感の測定方法」左頁参照)。

その結果、この「仮想的型」の学習に対する動機づけは、まさに他人から強制、指示されて行動する「外的動機づけ」や失敗すると恥ずかしいので承認されるために行動する「取り入れ的動機づけ」が極端に強く、他方、自分にとって大切なことだからするという「同一化的動機づけ」や、やること自体が楽しいから行動する「内発的動機づけ」が低かったのです。この4種類の動機づけはうしろに行けば行くほど自律的になるのですが、「仮想的型」の人はむしろ逆の他律的な動機づけに支配されていることとなります。

一方、「自尊型」の場合は、大切だからという動機づけ(同一化的)が高く、他人からの強制

によったり、恥ずかしいからという動機づけ（外的・取り入的）は低い傾向でした。

また仮想的有能感の高い人は、こつこつ勉強する、根性で頑張る、時間をかけて勉強することが成功につながるという、学習志向も低いのです。ここでは、可能な限り努力はしないで済む行動を選択する方向性が見出されました。

また、感情の不安定さも関係していると思われます。大学生に対して、怒りなどの「敵意感情」と、その怒りが静まる際に起こるとされる「抑うつ感情」について、7日間連続して日記を書かせました。そしてその記述から調べるといふ方法を取ったところ、「仮定型」の人は、対人関係において日常的に不安定であり、強い敵意感情と抑うつ感情を抱いていました（※2）。つまり、「仮定型」は、他人軽視ですから、当然、「社会人基礎力」でいう「チームで働く力」を低くします。そのみならず、学習を回避する傾向としては、「考え抜く力」も低くすると想定されます。また対人関係場面での不安定さは、「前に踏み出す力」も低くすると予測されるのです。

海外旅行に行かなくなり、大企業志向が高まる若者達

自信のなさという意味で、若者のやる気、意欲の低下もよく指摘されます。挑戦することを避けようとするのか、海外へ留学したり、旅行したりする若者が減少していますし、就職では、大企業志向や終身雇用願望が高まっていると言われますね。

どこの大学でも、昔は学生自身がテーマを決めて、学部を超えて勉強する「自主ゼミ」がたくさんありましたが、今はほとんどないように思います。しかし、授業にはよく出席していません。学習に対して受け身的な態度で、能動的な姿勢が弱いように思います。それは、今の学生はあまり本を買わなくなったとか、図書館での貸し出しが少なくなったというようなことにも表れています。

自信をつけるための方法① 役割を与え、やり遂げたら承認する

ですので、まず自信をつけてあげることが、若い人にはとても大事です。そのためには、小さい頃から自分を強化する、つまり自尊心を高めてあげるようにすることです。具体的には、大人は子どもに決まった役割を与え、それをこなしたことをきちんと認める。一人の人間として認められることで、自分が役に立っているんだという感情を持たせることです。それは、学校の掃除当番でも、家庭のお手伝いでもかまいません。集団の中で、仲間一人の人間として受容される。それによって、自信を持つとともに、他者を受け入れることができるようになるのです。

これについては、話し合いの機会をよく持たせている2つの中学校で、生徒に対して1学期の夏休み前と学年末の2月、自分をどのように見ているか、先ほどの仮想的有能感に関するアンケートを取った調査があります。そうしたら、17クラスのうち15クラスで、他者を受容する態度が出てきて、必ずしも統計的に有意とは言えませんが、仮想的有能感は減っていました。

自信をつけるための方法② 親密なコミュニケーション

もう一つは、若い人たちに「親密なコミュニケーション」を取れる環境を多く作ってあげることが重要です。これは、だからだと意味のない話をするということではありません。集団で力を合わせて物事に取り組むことで、皆で意見をぶつけ合って喜んだり悲しんだりして、お互いの「熱い心」に触れ合う。そうすれば、他者軽視もしなくなります。そんな機会を若い時代に持たない限り、大人になってから本当の意味での他者に対する信頼も生まれにくくなるのではないのでしょうか。

自信をつけるためには、このような環境を作ってあげた上で、自尊心を高め、子ども自身の主体性や自律性を育ててあげることが最も重要です。そのことが、学習への動機づけを高め、問題解決力も高めるのです。仮想的有能感を克服して、「社会人基礎力」を高めていくことになげることが、若い人には重要な課題と言えましょう。これは、「社会人基礎力」を高めていくのと同じプロセスだと考えます。

※1 S県H高校373名(男子215名、女子158名、高校1・2年生)、2004年11月実施/速水敏彦・小平英志(2006) 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究 14 171-180

※2 愛知県内の大学生998名(男性587名、女性411名、平均19.03歳)、2005年6月実施 /小平英志・小塩真司・速水敏彦(2007) 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験 パーソナリティ研究 15 217-227

●速水敏彦

1947年愛知県生まれ。名古屋大学教育学部卒。大阪教育大学助教授、名古屋大学教育学部附属中・高等学校校長などを経て、現在、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授(平成22年春まで研究科長)。専門は教育心理学。著書に『自己形成の心理―自律的動機づけ』(金子書房)、『動機づけの発達心理学』(共著、有斐閣)、『他人を見下す若者たち』(講談社現代新書)など。